

J・J・ルソー(1712~1778) Maurice Quentin De LaTour画(1704~1788)

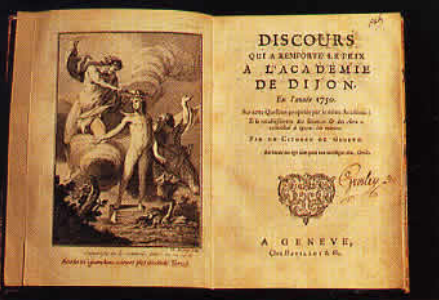
J.J.ルソーの生涯

ルソー(1712~1778)は、十八世紀の初めにジュネーヴの市民階級である時計職人の息子として生まれ、フランスで活動した啓蒙主義者であり、大思想家である。生後九日目で母を失ったため、幼い頃から父親と小説を読みふけったり、叔母のやさしい子守歌を聞きながら育ったが、家庭的には恵まれない人であった。少年時代から青年時代にかけても、落ちつかない放浪の生活をし、職業も転々として人生の表裏を経験し、それによって民衆のよるこびや悲しみを体験した。このような人生経験が、その後のルソーの思想的な基盤となったのである。青年時代に出会ったヴァランス夫人の庇護のもと、カトリックに改宗し、音楽を学び、科学と哲学の書物を読みふけり、一七四四年パリに行き、新しい記譜法を発表したり、オペラの作曲に取り

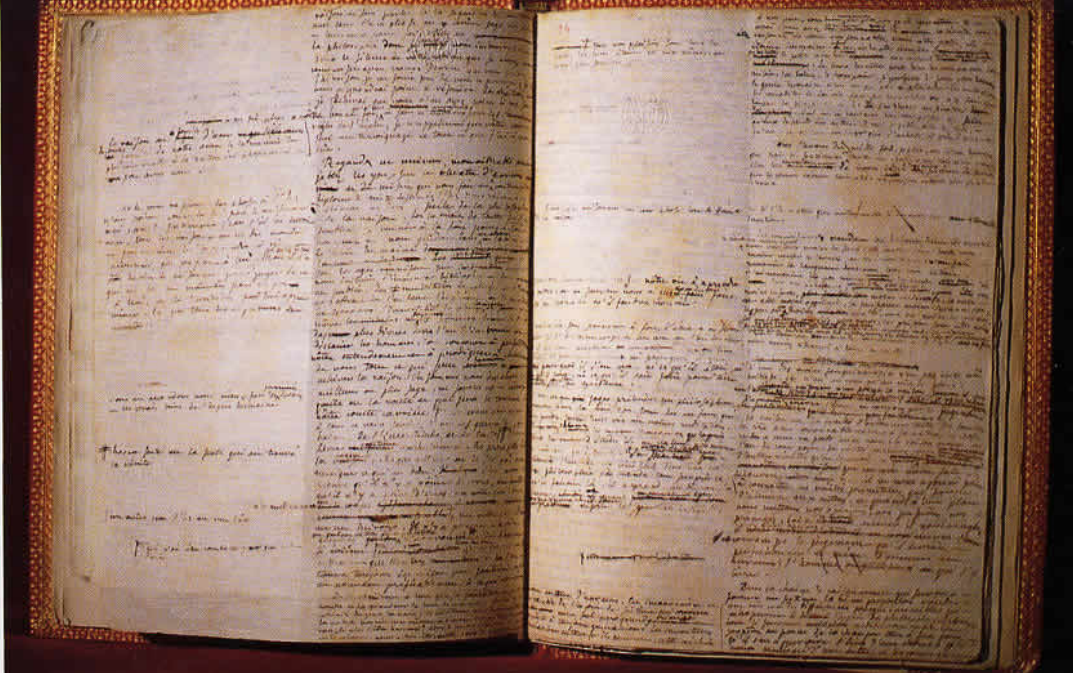
り組む中、テレーズ・ルヴァスールと出会い、共に暮らす。やがて五人の子どもが出来るが、全て養育院に送ることになった。ルソーの名が世に出たのは、一七四九年にディジョンのアカデミーが出した懸賞論文に応募し、それに当選したときである。懸賞論文の題目は「学問と芸術の復興が習俗純化に寄与したか」であった。ルソーはここで、当時の上流階級の政治、経済、教育、道徳がひどく墮落しているのを痛烈に批判した。学問よりも徳の重視、教育の改革、奢侈と不平等への嫌悪、原始状態の讚美など、彼のいう自己革命の契機をなしたものとして重要なものとされている。

この当選でルソーは一挙に有名になった。デュパン夫人やデイドロ、ダランベールらと親しく交わり、啓蒙主義の思想家の一人としてサロンに出入りした。一七五三年に同じく懸賞論文「人間間における不平等の起源は何か、そしてそれは自然法によって是認されるか」に応募したが、あまりにも過激な政治論でことさらに落選させられたといわれている。一七五四年ジュネーヴに帰り、再び新教に。一七五六年からはパリ郊外モンモランシーの付近に隠遁し、午前は写譜、午後は散歩しながら思索し、執筆を続けた。一七五九年『新エロイズ』を書いた。これは啓蒙的理性と自然的感情との葛藤を描いた小説で、一八世紀の啓蒙文学から、浪漫主義的近代文学への転向の先駆をなす作品と言われている。さらに一七六二には、二つの著者、「社会契約論」と「エミール」が出版された。

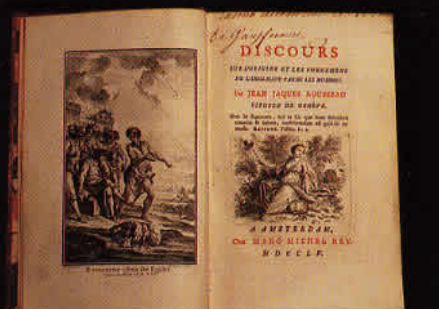
『社会契約論』(Le Contrat social)はルソーがその政治論をさらに発展させたもので、「人間は自由なものと生まれた。しかしいたるところで鎖につながれている」という冒頭の言葉が示すように、「自由」の概念を出発点にして、正しい国家のあるべき姿を絶えず論じている。『不平等起源論』において腐敗した絶対王政下の現実に激しい憤りを示したルソーは、この『社会契約論』では政治社会における自由・平等の実現に対する積極的な熱意と構想を示している。一七八九年のフランス革命は、間接的にはルソーの思想からきている、といわれるほどこの書の与えた衝撃は大きかった。教育の面でも、ルソーは、当時誰も主張できなかった大胆な思想をうちだしている。彼の教育論は『エミール』(Emile ou l'Éducation)と『告白』(Les Confessions) 1762~1789) によると、彼の後援者でもあり知己でもあるシユノンソー夫人から、自分の子どもへの教育について助言を求められたことが、そもそもこの教育論を書いた動機だといえる。この書は上流階級の息子エミールと家庭教師による、なかば小説的で教訓的な長編物語である。この著作を一貫して自然の長編物語である。この著作の冒頭にはその根本原理が次のように述べられている。「造物主の手を出るときはすべてのものが善であるが、人間の手に移されると、すべてのものが悪くなる。」ルソーは『社会契約論』のなかで、高度の文明状態は真実の政治原理の上に打ち立てられるべきであるといひ、人間の権利は自己自身の本性の法則に見出されるべきであると説いているが、『エミール』のなかでは、教育は社会の形式や学校の因習に基づくべきものでなく、人間の本質についての知識をよりどこ



『学問芸術論』初版本 (1750)



『社会契約論』真筆原稿 (1761) (ジュネーブ大学附属図書館所蔵)



『人間不平等起源論』初版本 (1755)



ルソーの故郷スイスの山々



『エミール』初版本 (1761)



『新エロイーズ』初版本 (1761)

ろとしなければならぬと述べている。ルソーのいう「自然的人間」とは野蛮人ではなく、自己自身の本性の法則によって支配され、指導される人間のことであり、自然に従うことであると叫んでいるのである。

教育史上、ルソーによって初めて子どもは大人の世界から解放され、子ども本来の世界に帰ることができると言われるが、『エミール』の次の一節がよくこのことを物語っている。

「不確実な未来のために現在を犠牲にし、あらゆる種類の鎖で子どもを束縛し、決して享受することが出来ないとおもわねばならない遠い未来の幸福のために、まず幼年時代を不幸にするような教育に対して何と言ったらよいであろうか。例えばこの教育の目的は尤もだと仮定しても、絶えがたい軛を受け、将来役に立つかどうか分かりもしないのに、囚人のようにに絶えず労働を課せられている憐れむべき不幸な子どもを、どうして憤激なくして見ることができよう。……子どもを愛せよ、子どもの遊び・喜び・愛すべき本能を助勢せよ……」

これらの著作こそルソーの当時の社会に対する挑戦であった。こののちルソーは迫害を受け、スイスに逃れ、そこから一七六六年ヒュームとイギリスに渡り、翌年フランスに戻った。以後三年間、テレーズと共にさまよい、パリで簡素な生活をした。次第に病的となり不幸に陥る。「対話」と「孤独な散歩者の夢想」を書いた。

一七七八年五月、保養のためエルクムノンヴェイルへ行き、同年七月二日波瀾に富んだ生涯を終えた。遺骸は一七九三年十月一日革命政府によってパリのパンテオンに移された。

啓蒙主義の完成者であると同時に破壊者といわれていたルソーは、その思想の根本原理をあくまで人間に、人間そのものに見出し、人間そのものから導き出した。ルソーは啓蒙主義の「合理性」や「理性」万能に対してむしろ深い感情主義をもつて、悪政と圧政に喘ぐ民衆に深い同情を寄せずにはいられなかった。彼は当時の甚だしい社会的不平等に對し最も激しく反抗した。彼は貴族主義的な「理性の法則」に代わって自然に対する信頼、民衆に対する信頼、更に人は各人のうちに本来自ら善をなす能力をもつという信念に基づいて新しい福音を唱えた。その生涯を貫いた信念は民主主義であり、民衆に対する共感と個人の価値に対する信頼であった。生きることは愛すること、それはルソーが人々に伝えようとした心からの叫びだったのである。